

私の戦争体験

第三集

平和はよりよい暮らしの礎。つとめ戦争は二度と許すことはできません。



いずみ



1981年8月

特集

大阪いずみ市民生活協同組合
堺市中安井町3-112第百生命ビル ☎0722(23)4533
●発行責任者/川島利雄 ●編集/機関紙委員会

昔の私を返して……

東條 清子・東北支部

昭和二十年八月六日午前八時十五分、広島が焦土と化した一瞬であります。広島の人々が夢見る事になった悲しみでもありません。

私は建物疎開のため榎町から東観音町に疎開し、家の中で家財道具を整頓している時、空襲警報が発令され、あわただしく身仕度をして避難しましたが、すぐに解除となり夏の暑さのため軽装になり、整理しておりました。

その時です。ピカッと電光の様な光が走り、瞬間もすごい爆風を受けて私は自宅の中で被爆し家の下敷になりました。一瞬私は生き埋めのまま死んで行くのかと思いましたが、幸いにも手を伸ばせば物につかまる事ができ、何とか倒れた家から這い出す事が出来ました。あたりを見ると髪を振り乱し全身血まみれの人が、よろよろと歩きながら逃げまどっている姿、火の手が迫り、倒れた家の柱に、はさまれて動けなくなつた子供が「助けて、助けて」と叫ぶ声を背にしなげらなすすべもなく小さな子供を背中に背負つたその子の母親が、両手を合せて拝みながら逃げて行く姿。私は助けを求める子供を放って逃げた母親が、どんな気持ちであつたらうかと、今でも考えさせられます。

空を見ると今迄見た事もない巨大な雲が広島上空をおおいつくし、住みなれた町は、紅れんの炎に

つつまれておりました。

私は近くにある天満川に飛び込み、火災の熱風から我が身を守りました。其の川には放射能で焼けただけた皮膚がたれさがり、手の爪足の爪で止っている人が、血まみれの人等が、次から次へと末期の水を求めてやって来ました。その人達は水を飲むと決まってお息を引き取り、川辺が死体でうす高く積まれてゆくのを、私は唯、ぼう然と見ている以外にありませんでした。まるで生き地獄そのものでした。

広島に立てば一望千里、見渡す限りの焦土と化した町には、辻々に身元の分らない人、性別も分らぬ真黒こげの死体、婦人が幼児を抱いたまま死んでいる姿、昨日迄はおもちゃを握り菓子に口を運んだであろう子供の手、昨日迄家族を養うため会社に通勤していたであろう男の人の足、子供の成長を祈り一家団らんのであろう男の人の足、子供の成長を祈り一家団らんの楽しい食事をこしらえていたであろう婦人の手、首、胴体、手足のバラバラ死体、あらゆる動植物の焼けた跡、人肉の塊があつちこち飛び散り、見るも悲惨な情景でした。

私は流れる涙をふきもせず、其の中を行方不明の叔母を探して歩き廻りました。二ヵ月後に半病人の様ながら格好でさまよい歩いている叔母に会った時は、涙も出ず唯しっかりと抱き合つたままでした。

戦争の恐ろしさ悲惨さをまの当り見て、戦争を引き起した最高責任者を恨みました。

又、私は死んだ人間にウジが湧くとは聞いておりましたが、生きている人間にウジが湧いているのを、生れて初めて此の目で見ました。ウジの湧いた人は私の叔父なのです。叔父は田舎のお寺に収容されており、私は長い時間をかけて会いに行きました。叔母に話を聞けば警報解除後に米屋さんにお米を頼みに行き、其の帰りに放射能を背中に受けたのだそうです。

叔父は、私を見て、涙を流して喜んでくれました。私は寝ている叔父を見て目をうたがいました。普通の人と変りがなく不思議に思い、叔母に聞きましたら、今に軍医さんが治療に来られるからわかる、と言われました。しばらくして、軍医さんが来られ叔父をうつぶせにされました。私は一瞬「ア」と言ったり声も出ませんでした。頭の前から足のかかとまで焼けただれていました。皮膚は黒く焼けており、皮膚と身の間にウジが湧いておりました。叔母はそれをピンセットで一匹、一匹取りのぞいておりました。私も手伝いましたが、臭くて、臭くて息がつかまる様でした。私はそこで食事をすることが出来ず、おにぎりを持って可部駅迄行き、駅のベンチで食べて帰る仕末でした。

三日間、私もそこに居りウジを取りました。取っても、取ってもウジが湧いて、取るのと、湧くのと競争の様でした。治療は軍医さんが天ぷら油をぬるだけの事でした。それから間もなく叔父は暑さに苦しみなながら、此の世を去りました。この腹立たしき、怒り、この無念はどこにぶつけたらよいのか、此が現実の世界かと私は疑いました。

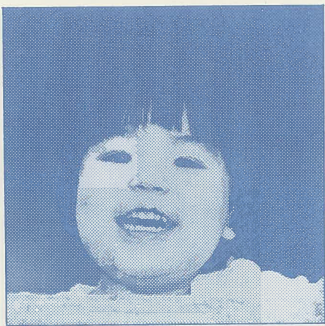
放射能を直接浴びなかつた私でしたが、放射能の死のワナは私の身体をじわじわとむしばみ始めました。

歯ぐきから出血したのに次いで、血便まで出始めました。重い物を背負えば、腕の付け根の所に紫のはん点が出ました。そんな私は、此の次ぎに髪の毛が抜けるとおしまいだ、と言われ髪の毛が抜ける事は、私の死を意味するのだと言う恐怖で乱れた頭のまま、一年近くも私は髪に櫛を入れ様とはせず、毛が伸びれば乱れたまま櫛を入れずに切っていました。爆心地より一・三キロと言う近い距離で被爆した私も、近い内に死んでしまふのではないかと思うと、居ても立っても居られませんでした。

幸にも原爆の死の恐怖からのがれる事が出来た私ですが、原爆被害者という烙印は一生滲消える事はありません。生き残った者におそいかかる生活苦、身体障害者と云う謂われなき差別、そして何よりも罪なき子供らへ遺伝するかもしれないという恐怖の日々、新聞を見るたびに私は何番目の原爆被害者として死んで行くのだろうか、この事はかり考え、朝、目を開ければ「ああ今日も生きていたんだな」と、涙を浮べた事も何度かありました。今も尚、あのいまわしい日の事が脳裏から離れる事はありません。

戦いの犠牲になるのは、いつもどこの国でも罪なき国民です。現在でもイランとイラクが戦争をしておりますが、そこでも罪のない人が多く犠牲になっております。

多くの民衆が惨殺され、苦しめられて良いのでしょうか。私は声を大にして叫びたいです。昔の私を返して。私につながる人を返して。我々の世がある限り崩



れぬ平和を築くために、二度とこのような過ちを繰り返してはなりません。ある本の中に「戦争ほど残酷なものはない。戦争ほど悲惨なものはない」と書かれています。

本当に戦争ほど恐ろしいものではありません。この恐ろしさは、経験した人でなければわからないと思います。戦争が終って三十六年、戦争の爪跡は深く、今なお原

新婚すぐに すべてが灰に：

昭和二十年三月一日。母は、父の所へ嫁いで来ました。その月の十三日、空襲警報で防空壕に一まとめにした風呂敷包みを持って行こうとした母に、父が、「又、警報だけだろうから包みは置いていきなさい」との言葉に、何も持たず着のみ着のまま空襲を受けることになりました。

実家が、道具商を営んでいた為、当時としては立派すぎるぐらいの嫁入り仕だったそうです。タンスの中味も、化粧のものは一つとして無く、すべて絹もので、頭に付ける髪飾り、メガネ、指輪など、大切なすべてのものが灰になりました。同じ折りに、母の義姉の子供が、熱さの為井戸に飛び込んで死んだそうです。そしてその後を追って姉も又、その井戸に身を投げ、なくなりました。義母も又、食糧不足から病にかかり、まもなく亡くなったそうです。死に際に、その義母は「仏壇に、御飯とお水だけはかかさずあげてち

爆症に苦しむ人を遺しております。一日も早く世界に戦争のない平和な社会が訪れる事を、私は切に願います。そして「戦争を知らない人々」へこの事実は、どんな事であっても語り継がねばならないと思います。それが私達戦争体験者の使命だと思います。世界の平和建設のため、この世から戦争の二字が消える様祈ります。

片山 憲子・八田荘支部

ようだい。あの世へ行って、ひもじい思いをするのはいやだから」と云って息を引き取りました。あれから三十六年たった今も、母は、御飯とお水はかかしたことはありません。

父は体を小児麻痺におかされ少し体が不自由だった為、子供のころから大分あまやかされ、育てられていました。しかし、この十三日の大火の為すべてを失ったのですから、これからは自分が動いて、妻を養っていかなくてはなりません。でもあまり働くことを強いられて育った父ではなかったので、半分は会社を休む月が多かったそうです。

それから母の苦労が始まりました。無理してミシンを買い内職をしながら、今日まで私達を育ててくれたのです。もしあの時戦争がなかったら、そう云って母に、嫁入り当時の話を聞かせてもらったものです。本当にあの時、戦争がなかったら、母は苦勞せず今



日を過ごしているかも知れません。もっと悲惨な体験を持つ人も多いでしょう。私達は、幸せな結婚生活を送っていますが、戦争が起きれば、又、私達もそういう

う悲惨な目に合うのです。二度と戦争をさせてはいけません。今だに母は、ミシンをふみつつけています。

大阪空襲 三月十三日の夜の事

昭和二十年六月、当時私は鈴鹿海軍工廠で軍属としてお国の為に働いていた。妹は南海電鉄阪堺線の始点駅、恵美須町の出札掛として勤務していたが、私が帰省した折に交した会話から大阪空襲の一端をお知らせしよう。

「大阪の空襲えらいひどかったんやね、あんたあの夜、出番やったの？」

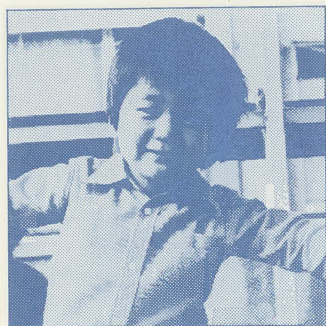
「うん、出番やったんよ。もう、なんともいえんような目に逢ったわ。もう、死ぬんやおもた…うちらあの時、もう出札を切り上げて眠りかけてたの。そしてら、空襲警報になったの。そやけど、マサカ落とされるところでへんものね。用意だけはすくにして平井さんと二人目を澄ましてたら、ブーンと飛行機の音が聞こえたの。」

敵か、味方かと思うるともう天王寺の方から焼夷弾落ち出したのよ。もうそれから夢中やった。線路へ出てみたら、もう目の前の恵美須町の交差点あたりへ花火みたいな焼夷弾がザーンと落ちて来たの。平井さんと二人また慌てて防空壕の中へ飛び込んだの。見てたら、男の駅の人たち皆で交差点へ火を消しに飛んで

行ったけど、何の役にも立たへんかった。

見る見る辺りは火の海になったの。ちよっとだけ様子見てたけど、こんなことしたら焼け死んでしまうような気がしてきたの。平井さんと相談して壕を飛び出したの。そして、霞町の方へ線路をつとって走って行ったん。そしてら、霞町のガードのとこまで来た時、こんどは頭の上へバラバラと焼夷弾の火が落ちてきた。もうあかん死ぬわと思った時、ひよっと横を見たら、若い女の人の外套に火がついてもえ出してんの。早よ脱がなあかん、うち、ヤキモキしてんのに、その人ウロウロしてしても脱がへんのよ。

そやけど他人の事かもうてられへん、自分らも火がついたらおしまいや思うて平井さんと一緒に、池みたいな大きい用水のとこまで走って行って水の中へ入ったの。そして頭だけ出してたの。見てたら、ほんまに地獄ってこんなもんやと思うたわ。大火事になってその明りで見えるさまは、ザンコクそのもんだったわ。国鉄の土手の上へ大せい逃げ出してきたんやわ。その人らみんなバケツや釜なんか手に持ってんの。あれは頭へかぶるつもりやったやろか？……」



「へーえ、えらい目に逢うたんやねえ……」
「それから平井さんと二人で敵機が退散するまでジ
ットと水の中で辛棒してたんよ。夜明け方、空襲警報
解除になってようやく水から上った時は、あーあ助か
ったと言って平井さんと抱き合って大声で泣いたわ。
われにかえって辺りを見廻したら、ショボショボ雨

沖縄からの引きあげ

田中 展子 ●新金岡支部

沖縄本島から船で一日、台風と砂糖キビで名高い「宮
古島」で、私達母子は終戦を迎えました。私は五歳、
妹三歳、下に弟がいましたが、まもなく亡くなりました。
ここが、あの激戦地、沖縄本島であつたら、おそ
らく私達も生きてはいなかったかも知れませんが、離
島は幸いにも大きな爆撃には会いませんでした。

昭和十八、九年、「東京は空襲であぶないし、沖縄の
年若い両親の安否も気づかわれるし宮古島に帰ろ
う。ともかく、妻と子供達だけでも東京から疎開させ
よう」と父は思つたのでしょう。沖縄が、アメリカに
占領されて、日本から切り離されようとは、夢にも知
らなかつた私の父は、危険な東京を離れて、妻子を、
故郷に帰すことにしました。

そういうわけで、戦争が終つた時、父は一人本土に、
私達母子は宮古島に、離ればなれになっていました。
占領されてアメリカの領土となつた島で、母は代用教
員をしたり、下駄の花緒を売ったり、なりふりかまわ

が降つて、焼け跡がくすぶつてたわ。えらい火事にな
つたら雨降るって昔から言うらしいけどホンマやわ……
。。
それから二人は濡れぬずみのまま我孫子まで線路を
伝うて歩いて行つたんよ。詰所までね……」。

ず動きながら、娘二人を養い、なんとかして、夫のも
とへ戻ろうとしていました。

その頃、父は鹿児島へ来ていました。ここから沖縄
へ渡ろうにも方法が無かつたのでした。たとえ船が有
つても、奄美も沖縄も、日本ではないのでした。私達
は、幸運にも、第一回の引き揚げ船で帰る許可を得ま
した。昭和二十二年の春でした。私は小学二年生、ま
もなく三年生になるうとう春のことでした。宮古島
から船で沖縄本島へ行きました。そこは、まったく何
も無い乾いた岩肌のむき出しの暑い所でした。激戦地
で生き残つた人々が必死で生活していただろうこの場
所で、しかし、私は島の生活にふれませんでした。す
ぐ収容所に入れられたのです。

私達一行、あちこちの離島から日本本土へ帰る人々
の群は、おそらく数百人はいたでしょう。トラックに
鈴なりに乗つて、カマボコ兵舎に収容されました。カ
マボコ型の兵舎が、数軒ならんださびしいところ、



今の平和教育は、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさ、
あるいは核を主体に行われているが、平和教育の
名を借りた反戦教育であるという人がいる。確かにど

平和で健康な生活を営んでいるはずが!!

尾崎美佐江 ●布施支部

ういう状態が平和であるという事を定義づける事は難
しい。しかし理由はどうであれ、広島に、長崎に原爆
が落され、数十万の命が奪われた事は動かし難い事実

一、二週間とどまりました。食事は、コーリアンの御
飯をアルミ食器で食べるのです。時々、缶入りのチー
ズが配給になりました。大人には色々な心配も有つた
でしょうが、まだ幼なかつた私と妹は、毎日の珍ら
しく、進駐軍と呼んでいたアメリカ兵を眺めたり、木
一つ無い岩山で、「髪洗ひ粉」を作つたりしてしまし
た。「子供は調べられないから」と例えは、アメリカ製
タバコなどを、ポケットに隠して持たされたりした時
は、犯罪者になつたようにドキドキして、重苦しい不
安を感じたり、検査を受ける為に、米兵の前に、大人
の人が列を作っているのを、戦争に負けたから……と
屈辱的な気持を抱いて、うろろろ歩きまわつたりした
ものでした。

「ふくろうおばさん」と、あだ名されたこの人を、
おそろしくも、かわいそうにも思つたものです。後で
知つたところによると、その人は、身よりも、帰るあ
てもないままに、米兵のなぐさみ者になって、生活し
ていたという事でした。その後、どうなつたでしょう
か?本国に帰つても平和な生活があつたかどうか……
戦争に流される女のあわれさ、そして又、国籍という
ものの不思議さを思わずにはいられません。この街が、
後の基地の街、コザ市になつたでしょう。
私達、引揚者の群れは、LSTという船倉が大きく
口を開ける型の船に、鰯のように積み込まれて、佐世
保に着きました。船の生活は苦しかったし、お便所や
何やかや、トラアルも有つたのですが、子供だったせ
いか、苦にもしないで、佐世保の収容所でも、香たけ
なわの西海国立公園の美しさ、桜の花のきれいだった
ことだけが印象に残っています。この陸軍の(と思ひ
ます)建物に一週間程も居たでしょうか、やっと長崎
から汽車に乗りその間、荷物をスラれたりしましたが
(中はコーリアンの入つた弁当箱だけでした) 無事、
母子三人、父のもとに帰ることが出来ました。



なのである。
私達広島で生れ育った者にとって、その日は一日中胸が痛くなる程に、三十六年も前に起った事実が昨日の事の様に呼びおこされるのである。

私は戦後の生れで、実際には知らない。でも、その事を体験された先生や、隣近所の人あるいは父親に聞いて育ったので、あたかも自分がその場にいた様な錯覚を起してしまうのである。私達は、いわゆる戦後のベビーブームの中で育っているので、校舎はいつも増築ばかりしていた。その折、砂場、給食室のあたりでは、必ず人骨が何体か出た。喉の乾きを癒やすために、水を飲みに来てそこで力つきてしまうのであった。又砂場は大体校舎から離れている為、そこで火葬にしたのである。

八月六日、その日は薪の配給日であった。大八車を引いて市内に入った人は、薪の变りに、火傷で苦しむ人間を乗せて郊外へ出た。むろん己も皮膚のボロをまわって……。

女性で被爆した人のほとんどは、髪が全部抜けてしまった。櫛を入れる度にゴソツと抜けるので、気も狂

わんばかりであったとか……。髪の方はしばらくすると生えたが、今だに生毛の様な柔らかくて短かく、帽子の離せない状態であったり、眉毛が生えてこないの、その日以来描いている人もいる。車の下にうまくもぐり込んで火傷はしなかったが、とうとう子供に恵まれなかった人。同じ胎内被爆でも一方は秀才に、他方は精薄として生れて来た人。本来なら、五体満足で生れてきて、病氣など知らずに、平和で健康的な生活を営んでおられた筈の人はかりなのである。

その人達が何をしたというのでしょうか？ 醜い姿を見られるのは嫌、と門戸を閉ざし、遂には、心までも閉ざしている人も多々あります。

八月六日を、あるいは燈籠流しの行われる八月十六日を、物見高い観光客にじゃまされなくて静かに過ごす事が、そういう人にとっては「平和」なのかも知れません。

私にとっての八月六日は、犠牲者の中には、今の日本が必要とする様な人が、たくさんあったであろうが、今、自分のなすべき事は他にはないのであろうか……と、日ごろの生き様を振りかえる日なのです。

「子供の足に火が」熱さも忘れて手で……

小田 茂子・春日丘支部

私は四年生の小田啓史の祖母でございます。想い出すままに、昭和二十年六月二十八日の夜のでき事を書きます。六月十七日、夫は召集を受けまして、浜田連

隊に入っていました。小学教師をしていた夫にも、遂に召集令状が来ました。それは六月十二日の朝でした。市内の南方に住んでいた家から、私は市内の清輝橋

近くの実家に父達と住んでいました。夫の実家は、今住んでいる田舎でした。

長男正典（哲史の父親）が生まれて、丁度一年たった時でした。年若い妻にとって夫のいない家庭は、淋しいものでした。

東京、大阪、神戸等、次々とB29の空襲を受け、沖縄にも米軍が上陸し、いったい日本はどうなるものか、食糧は配給、衣料も同じ、子供のおしめは、私の着物をつぶして作り、牛乳も、ミルクも手に入らず、不安な日々を送っていました。前途に希望のない世界に住んでいる者にとって、唯一の願いは夫が元気で帰って来ることでした。この願いの叶えられる日など考えても無駄です。夫は小学六年生の受け持ちの子供に、六月中旬に岡山はきつと空襲されるだろう。君達は死んではいけぬ。先生はきつと生きて帰るからとて、浜田へ向ったこととす（終戦後、生きて帰った夫のことはです）。

二十日過ぎのこと、岡山が空襲されるとの噂が広まりました。軍の秘密として、人に言うことはできません。不安におのくままに二十八日の夜が来ました。真夜中過ぎのこと「田中さん、田中さん、空襲よ、」外からの大声に目を覚まして戸を開けると、どっしま

しょう？家の回りは火の海です。正典を背負い、祖母の手を引き、別れ別れに、無我夢中で南へ、南へ（南は田んぼ）と逃げました。照明弾と、焼夷弾が、雨アラレと降って来ます。その明るさは、昼を欺くほどでした。アッ！子供の足に火が！正典の足に火がついて

います。熱さも忘れ、手で消しました。火傷の後は、今も残っているはず。夜が明けました。岡山市は灰になりました。私の家は焼けずに残りました。子供が下痢をし、乳は出なくなりしました。番茶がほしいのですが、どこにもありません。大病院に通いましたが、治りません。私は半は諦めました。しかし夫が帰って来るまではと、頑張りました。

九月十八日、関西大風水害に会いました。家の軒まで水に浸かり、食べ物もありませんでした。その時をどうして過ごしたか、忘れませんでした。十月三日、瘦せてけた体と、シラミの付いた毛布一枚、わらじを履いて、夫は帰って来ました。

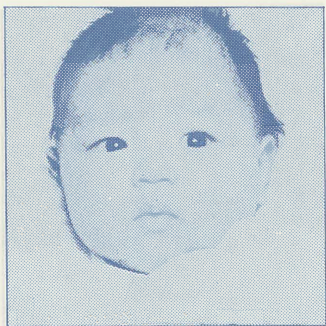
それから三十六年たちました。私も夫も、還暦を迎えました。孫も五人あります。今は夫と二人で岡山近郊で、田と畑を少しばかり耕しています。畑の草取りが日課です。

ああ僕のウチが燃え落ちる

T・N・藤井寺支部

昭和二十年三月十三日、夜九時頃、大阪港区の私の

生まれた家が、空襲で焼け落ちた。その時私は四歳半



折悪くはしにかかっていた私は、頭からねんねこを被せられ母に背負われて、家の前の道路に掘られた防空壕に近所の人と一緒に避難していた。しかし空襲が次第に激しく近くなったため、中学校へ移動することになり、再びねんねこを被せられた。

防空壕から一步出た途端、見えたものは、真赤な炎の町と目の前の我家の燃える様子だった。母は命からがら逃げる途中「見たらあかん。見たらあかん」とねんねこを更に深く私に被せたが、小さい私にとってもあまりにも異常な体験だったせいで、熱があったにも拘らず小さな隙間からのぞいていたので、いまだに私の記憶から離れない。

戦後幾度か母が語ったことは、我家の焼ける様子を見て、とっさに考えたことは「ああ今度こそ無一物になってしまった」であったという。それは結婚後十五年間それまで室戸台風などの大きな災害を乗り越え、又、父の応召後も、女手一つで奉公人を使いながら小さな薬局を何とか維持してきた母にとって余りにも大きなショックであったと思う。しかし避難先の中学校の体育館で会った近所の人々や、ほんの一時、熱のある私と、姉二人を預って呉れた知り合いの方々に、「子供が無事なら何より」と、慰められ、非常時の中の他人への思いやりに随分助けられた様であった。

終戦の頃

八月十五日が、まもなくめぐってくる。最近、終戦の頃のことを思い起すことが多い。年齢がそうさせるのだろうか、それとも、戦争のきなくさを感じさせる世情がそうさせるのだろうか。

私が、和歌山県田辺市で、小学校に一年生として入学したのは、終戦の前年であった。戦争は、すでに、おしつまっており、毎日のように空襲警報が発令され、上空をB29の大編隊が大坂方面を空襲のために飛来するのを何回となく見上げたものである。家の床下に小さな防空ごうをほって、背中に米を入れたリュックを背負って、かくれたものであった。まもなく、仕事のある父をのこして、母と子供達が、富田村に疎開した。田辺市の海兵団が空襲をうけて、真っ赤にもえるのを遠く富田の家の前から眺めたのも、それからまもなくであったろう。

暑い夏の日であった。妹をつれて、当時大川と呼んでいた富田川の堤の上を歩いている時、小学校の担任の女の先生に出会った。先生は、「今日は、大事な放送がお屋にあるからね。お家の人に言っといてね」と

私の記憶の中には、中学校体育館内の雑踏や、避難中に次から次と頭上から降って来る火の粉、一時預けられた家で食べた炒り米が香ばしくおいしかったこと、飛んで来る火の粉の中で父が、川や飲料水の中の毒物検査のため、一晩中走り廻っていて目をやられ、母が懸命に目を冷やしていたことなど、避難中の出来事が断片的に残っている。

無一物になった戦後に、生活の立て直しのため散々苦労している時、両親、特に母はよく「戦争がなかったら、お前にももっと滋養のあるものを食べさせられたのに」とか「姉達も、もっとよい学校で好きな事を仕込んでやれたのに」等、ぐちもつかず、しんみり話していたことが思い出される。

戦争が我々庶民に与えたものは、ただ艱難辛苦のみであった。今、再軍備を唱えているものは、あの戦争体験が余程楽しかった者か、人には云えない余程甘い汁を吸ったことのある者か、或いは、戦争を子供の戦争ごっこぐらいにしか考えない者のいずれかであろう。国民の血と汗の結晶（中にはそうでない人も居るが）である税金を軍備に使うのではなく、国際平和（例えば海外青年協力隊の様に）の為に使うのなら、世界中から日本は尊敬されるだろう。そういう日が一日も早く来てほしいと願ってやまない。

鈴木 良雄・三国支部

いわれたようだ。とんで帰って、母につげたことをおぼえている。

戦後は、どこの家でも共通の食糧難であった。毎日の食糧を確保するのに、死にもぐるくらいであった。二歳にならない下の弟が栄養失調で死んだのも、このころである。

このような苦しみは、戦争によるものだとはいきり自覚したのは、中学校に入ってからであったろうか。まだ、弁当をもつてくることができずに、昼食の時間に、鉄棒のところにかたまっている友達をみて、無責任に戦争をひきおこした者への怒りを強く感じたものである。

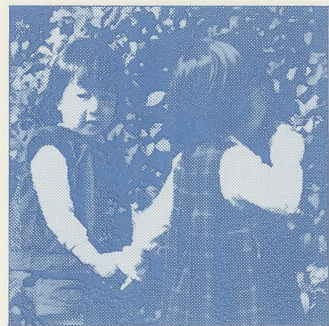
今、平和主義をうたった憲法前文が、教科書から削除され、軍備拡張と公然たる核持込みからはかられようとしている。あの終戦の八月十五日と戦後の苦しみを経験したものは、今一度、当時のことを思い起し、これからの日本を発展させていく子供達のためにも、戦争に対する憎しみを語る時だと思えるのである。

壕の中が母との別れ

三十七、八年前、私が住んで居りましたところは、大阪は福島区海老江でございます。私が十二、三歳の頃、毎日空襲警報が鳴りましたが、すぐに解除になっており、運命の二十年三月十三日、たしか夜中の十二

春本 安子・河内長野支部

時頃だったと思います。空襲警報が鳴りましたが私はすぐに解除になると思いい、パジャマの上にセーターだけ着て五歳の弟の手を引き壕に入りました。父は町内の防空主任をして居り



ましたので、警報が鳴るとすぐ町内を見廻りに出て行き母は赤ちゃんを背おって壕の中に入りました。壕の中に入って十分もたったでしょうか、突然頭の上にザーともヒューーとも口では言う事の出来ない音がして、思わず弟をだきしめ「これでおしまい」と思いました。やがて破裂する音、母が私の名を呼びながら逃げると申します。私は母と反対の出入口から逃げ母の姿をさがしましたが、その辺は火の海で父も母も私もバラバラになり、どうする事も出来ませんでした。

家が一軒火事になっても大変ですのに町内、いや大阪の町の中であつちが火の海、こつちが火の海で、火がおさまった時は亡くなられた方がずい分おられて、御遺体がつうと並べられておりました。私の母は、とうとう姿を見る事もなくどこに行ってしまったのか、炎の中から逃げきれなかったのか、遺体も見つかりませぬ、壕の中が最後の別れでございました。

それから父と私、弟と三人、毎日やってくるB29には悩まされました。カマドの火を付けたら空襲、また

火を消して、又つけると言ったあんばいで、ごはんはまともに炊かれず、食べ物もなく、よく大豆をいって壕の中でそればかり食べておりましたので、お腹を下してトイレに壕から出たら機銃掃射でやられます。一度は壕に入っておりましたが、そにはよく弾が落ち、飛び出して淀川の堤防に逃げた事がありました。そして機銃掃射でかくれる所がなく、足元に機関銃のたまがびゅんびゅんとくるのです。こんな恐怖と食べ物無い苦しさ、肉親の別れ、こんな姿が戦争です。

八月十五日戦争が終って父も疲れ切っていました、北九州小倉の身内を頼って行ったのでございます。九州に行く時も今の様に冷房など入ってなくて、石炭を運ぶ貨車で屋根もなく、トロツコの貨車で毛布を頭から被って、着のみ着のまま大阪を後にしました。

今、私に男の子が二人、女の子が一人居りますが、戦争に自分の子供、主人を出したくないです。あの当時のお母さん方の悲しい心を思うと本当に身につまされま

〓白い御飯をおなかいっぱい……〓

山田 幸子・美原支部



昭和十九年八月、徴兵検査で乙種合格だった父にも赤紙が来て、広島県の呉に入隊しました。入隊するまでの一週間、母はさらに赤い木綿糸で結び目をつくる千人針を用意しました。一人でも多くの人に結んでもらうため、親類縁者はもちろんのこと、白いか

つぼう前かけに「大日本国防婦人会」のたすきをかけ、街頭に立って道行く人をお願いしました。当時はよく見かける風景でした。国民学校二年生だった私も、千人針を身につけると敵の弾にあたらなと聞き、なれない手つきで一生懸命結んだことを覚えています。

昭和二十年になると戦禍はいよいよ激しさを増し、庭に掘った防空壕の中に大事なものを、瀬戸物などをリンゴ箱に入れて疎開させました。私自身は幸いに被災にはあっておりませんが、近くに桜や鹿で有名な池田の五月山公園があります。戦時中はその山のどこかに兵器庫があつたようで、雨の如くに焼夷弾が落とされ山のあちこちから黒煙と、火の手が上りました。戦災のあとには決して雨が降り出し、子供心にどうして雨が降るのか不思議に思ったものです。

堺の空襲の時は、夜空が真赤に染り、何本ものサーチライトの光の中に、敵の飛行機が白く浮び高射砲のさく裂する音が聞えました。

夏になると大きな花を太陽にむけて咲く、ひまわり、その種も食糧になりました。ほしがりません、勝つまでは、物資は乏しく、狭い庭も畑に早替り、サツマ芋、かぼちゃなどところ狭しと植えられました。

現在、家畜の餌になっているサツマ芋のつるや、かぼちゃのつる、種は勿論、野草までも摘んできて食べました。タンポポやほこべのおしたし、ノヒルの雑炊、米粒はお箸にかからないぐらい少ない中にノヒルを入れ、くさ味消しにカレー粉を入れて食べたり、米ぬか

をいって麦こがしのように食べましたが、喉がいがつぽくなり、ゲェーゲェーいいながら食べました。〓白いごはんがおなかいっぱい食べたい〓、子供心にいつも思っていました。

育ち盛りの子供三人をかかえた母も大変だったでしょう。箆の中を着物が一枚ずつ、お米や麦などに変わっていきましました。なれない手つきで田植や稲刈りを手伝い、お札に食べ物をもったりもしました。

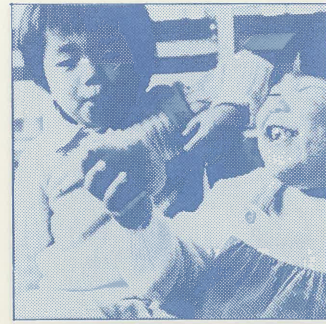
終戦の日だったか、祖母が防空壕の中に入れていた、とっておきのもち米と小豆で炊いてくれた赤飯の味は、今でも忘れることが出来ませぬ。豊富な物の中で育った今の子供には、想像もつかないことですが、食べることに関心が強いのは、その時の「うらみ」でしょうか。

応召した父は運が良かったのか、日本の国内を転々としたのち復員し、現在健康な日々を送っています。同じころ呉に入隊した人達の多くは、満足な訓練一つせず、艦に乗せられ南方に向ったそうですが、戦うことなく途中、海のもくずとなられたようです。

だんだん風化していく戦争のおそろしさ、悲惨さなど子供たちに正しく伝えていかねばと思う昨今です。

追憶の中より

高橋八寿枝・狭山支部



昭和二十年に入ると、戦争はいよいよ激しくなつた。大阪市内にはきびしい灯火管制が布かれ、水がゆの夕

食がすむと、四人の子供を寝床に入れる。少しまどろむ頃、きまつたように不気味な空襲警報が鳴る。一歳

の次女、三歳の次男をかかえ、上のふたりの子の手を取って、暗い裏の防空壕に待避する。キーンという爆弾の落下する音、ドーンと落ちた地響き「ああ、最後だ」と耳を覆うたのも幾度か、食べるものも、着るものもない、眠れない都市になっていた。

当時、私の家族は九人であった。老父母はすでに死ぬ覚悟を決めていて、絶対避難はしないという。夫は教師であり、ずっと学童疎開に付き添って不在了だったし、私もまた、ほとんど空っぽになっていた校舎を死守せねばならない留守部隊の教師であった。八歳を頭に四人の子供があったが、その世話はず守りのS子にゆだねていた。情勢はますます切迫してきて、幼児を持つ家庭は一日も早く疎開するように、半ば強制的にさえなってきた。

昭和二十年二月二十四日、私は夫の故郷である紀州への疎開を決意した。

その日は寒風肌をさす日であった。「行かしてもらいます」と悲壮な挨拶をすまして、学校からそのまま近鉄の今川駅に急いだ。駅はぎわめきの中に、異常な緊張とあわただしさに充ちており、どの顔もヒリヒリしていた。一歳の子を背負ったS子と隣組長のM夫人、それにT教頭先生が見送りに来てくださった。

「これ、我々の給食のふんや、持って行って」と十五・六個の長パンを、はだかのまま風呂敷につつんだのを、私の腕にかけてくださったT先生のきろっとした眼が、いまだ忘れられない。このパンのありがたかったこと。

「もうお別れです」とS子は私に赤ん坊を背負わせ、その場に泣き伏した。S子は長年、わが家に奉公して

くれた、なかなかのしっかり者で、いま五十八歳、健在である。

私は、紺いろのスフ・サージのモンペ姿に一歳の子を背に、三歳の次男の手をひいて、着のみ着のまま、おむつとパンの入った袋を持って、生まれ育った懐しい大阪を去った。

それから十七日の夜、疎開地から見上げるかつらぎ山脈の北方の空が夕焼のように赤くなったのを見て、村じゅうは騒然となった。

先刻、北方に向かったB29編隊の第一回大阪空襲だったのである。

残してきた父母や夫の安否を思い、その夜は一睡もしなかった。この爆撃で大阪市内は凄惨を極め、川に飛び込む者、瓦礫の中で焼死した者、目もあてられなかったとの後日のニュースに、私は胸をしめつけられた。

疎開の生活も生やさしいものではなかった。洋裁の縫い賃として米を貰い、麦を貰いしてもなお足らず、おなかですくので、子どもたちを早く寝かせると「疎開人はけっこうなもんや、早う寝て」という村人のせりも耳に入ったりした。

あれから三十六年、多くの困苦や悲しみに耐えて生き抜いてきた今、私は、この安穩な生活にいたることが現実とは思えないほど、有難いとしみじみ思う。しかしこの安穩が何時までつづくのか、世界の情勢は、まともや、きなくさい空気にゆれ動いている。

人間は、どうして果てしない愚かな争いを続けようとするのであろうか。今後、もし核による戦争がおこれば、敗者のみ滅び、勝者だけが生き残れるという従

来の戦争とは一変して、全人類絶滅につながるであろう。広島原爆の何十倍もの威力を持つ核兵器が、次々と地球上に作られているという現実を知って、何と

教室も一瞬にして……

戦争も末期に近づいた昭和二十年四月二十六日でした。東京・大阪と大都会は全部焦土と化し、空襲も地方都市にも移っていました。

私が爆撃を受けたのは、これといって軍需産業のない瀬戸内海に面した静かな地方都市愛媛県の今治市です。

それまでは一度も爆撃は受けてありませんでした。その日は薄曇りでした。警戒警報でしたが皆んな元気に登校し、一時間目の授業も終りに近づいた時、空襲警報になり防空壕に行く暇もなく爆音が聞こえ、ヒュードーンと音がしましたので、何処がやられたのかと騒々しくなり話をしていましたら警戒警報になり、ひと安心をしておりますと、二時間目のベルが鳴り、国語の授業が始まりました。興奮している生徒達ですので一人の方が席に着くのが遅くなり、先生が説教を始めた時でした。また飛行機の爆音が聞こえたかと思うと、いきなり今度はドカーンとものすごい衝撃で、校舎は揺れガラスは全部割れて飛び散って来ました。

皆んな机の下にもぐってしまいました。一瞬、恐怖で辺

ても、核が戦争に使われることのないように祈らずにはいられない。

井関 睦子・狭山支部

りは静かになり、そのうち我にかえり頭を上げますと天井は崩れ粉々に割れたガラスは教室や廊下に散っています。その中を必死で校舎の外に飛び出してみますと校舎は半分吹き飛ばされてありません。二階の生徒は一階に落ち、一階の生徒はガレキの下敷となり、大惨事となってしまいました。

私の教室は残った半分の教室でしたので助かりましたが、十三歳の私には自分の逃げるのが一生懸命でした。人家のある方に逃げました。二百メートル位走りますとお寺がありお寺の方が「うちの防空壕に入りなさい」といって境内の防空壕に入れて下さり、その中には十人位の人がいました。

怪我をした生徒を女の先生二人で、一人は頭を持ち一人は足を持ち「しっかりするのよ」と言い乍ら、タンカがありませんので引きずる様にして運んで来ました。その先生も顔から血を出しモンペは破れ「誰か包帯を持っていませんか」「オムツならありますか」と言っていてそれを借り、止血に使いました。私は友達の顔を見るのが恐ろしくなり目を覆ってしまいました。防空壕の中も赤ちゃんの泣き声と共に暗い空気がいっぱい



す。
そのうちに消防団の方々も来て下さりガレキの下敷
になっている生徒達を助けて下さいました。この時、
先生四名、生徒四名即死、重軽傷三十余名出ました。
もう勉強どころではありません。四、五日して学校
に行ってみますと学校の周辺には大きな穴が十個位あ
いています。時限爆弾の破裂した穴です。私達生徒は
その上を通って逃げていたわけです。もう少し時間が

灰色の青春

木村 友子・三国支部

「朕深く世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措
置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト炊シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ
告グ……」

かくして一九四五年八月十五日敗戦をひかえた。原
爆忌のめぐってくる暑い夏と共に戦争の悲惨を思いお
こさずにはいられない。私の父も「聖戦」という美名
の名のもとにシンガポールの兵站病院で五十一歳の生
涯を閉じた。父の口惜しさ無念さを感じる時とき激し
い憤りを押える事ができないのです。

一銭五厘の赤紙一枚で兄も召集されました。十五歳
の時母を亡くした私は年老いた女中さんと二人の生活
を余儀なくされてしまったのです。祝賀のぼり旗をた
てて愛国婦人会、国防婦人会、在郷軍人会の方達が榮
隊に合せ日の丸の小旗を手に、天にかわりて不義を打
つ……と歌いながら駅に向かう華やかな風景も、家

その時に合っていたらと思うと今でも背筋の寒くなる
思いです。
それからは毎日不安な日々です。何時死ぬかもわか
らない恐怖は言いようのない恐ろしいものです。
この様に、戦争とは何の罪もない人達も無差別に殺
戮が行われるのです。いつまでも平和を願わずにはい
られません。

族の者にとつては悲劇の幕明けでもありません。

昭和十九年落葉樹も秋の色をみせ始めた頃、北海道
の国鉄に勤務していた私達女子職員を対象に、一週間
泊り込みでの軍事教練の特訓を受けました。「敵兵と
思い一突きにせよ」との教官の号令のもと竹槍を手に
藁人形がけて突きさし、又、爆弾投下準備用の消
火訓練もしたのです。食料といえはおからやふすま団
子を主食として辛ずるや大根の葉、糠になる野の草は
何でも食べて飢えをしのぎました。

農家に衣類をもつて行って分けてもらったわずかな
かりの米、芋、野菜もやっとなどついた駅で取締り
の警官に没収されてしまった事も幾度か……。炬かぎ
や母の形見の指輪類も供出させられ、畠や田んぼに強
制労働奉仕しました。妊身隊に志願して軍需工場
で生産労働もしました。忠君愛国の思想のしみこんで



いた私は、只、天皇陛下のため立派な軍国の乙女にな
ろうと決意する事を当然と思っておりました。「欲し
がりません勝つては」を相言葉に灰色の青春は消えて
しまいました。

終戦後、石川県の実家に帰り、浜に出て製塩作業や
地引網を手伝い、塩や魚を売ってもらい、金沢に長野
に東京にと売りに行き、それを資金に闇市で長靴を買
い、蘭舟の底に乗り北海道の炭鉱町を歩きました。「買
出し部隊」の人達で列車は鈴なりにになり、デッキにも
連結器の上にもトイレにまで人々は溢れました。

大きな歴史の渦の中に巻き込まれ、押し流されてゆ
く事にも何の疑問をもつ事もなく過してきた私でした
が、一九四六年十一月三日新憲法が公布され、その原

戦死した兄の思い出

松岡千代子・美原支部

兄の戦死は、昭和二十一年三月二十五日戦病死とな
っています。遺骨もなく白木の箱に遺髪がほんの少し
入っただけです。

もし内地で終戦を迎えていたら、生きて帰れたので
はないかと残念でなりません。母は食べる物もなく米
糞失調で死んだ兄のことを、「あつにおかいさんでも、
お腹いっぱい食べさせてやりたかった」と言います。戦
友の方が痩せ細って命からがら、二十一年五月に復員
されて、兄の最後の様子を知らせに来てくださったの
です。其の方も、食べる物がなく、ねずみやかえる、

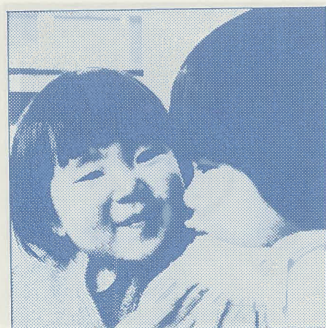
理にふれた時の感動を忘れる事はできません。政治な
ど無関心に近い私でしたが自分の無知を思い知らされ
てゆくようになり、国家権威への不信は冷たい氷のよ
うに確かなものになってゆきました。

私達の子や孫は、平和な社会の中で人間らしく生き
ていってほしいと願っております。多くの戦死(病)
者の方達や、原爆で亡くなられた方達の犠牲の上にな
って、戦争は終わったのです。非人道的で悲惨な戦争は
二度と許してはならないと思います。靖国神社に眠る
戦死者の方達も戦争のない平和な建設を望んでいるこ
とでしょう。

ランドセル背負う地蔵尊は今もなお
疼く八月に無言の告発 (八王子相即寺)

草まで食べられたそうですが、兄はよう食べなかった
そうです。中国の長沙の野戦病院で、食べる力もなく
死んでいったそうです。

兄が出征したのは、昭和十九年九月、戦争も末期で
私達の食べる物も配給で、お腹いっぱい食べられない時
代で、慰問袋も大豆の炒ったのが精一杯の贈物でした。
出征しても兵舎もなく、天王寺さんで一週間位宿泊し
て、すぐ中国に発ちました。明日発つと言う前の日に
知らせをうけて、母と姉と私と、前の晩から、「ござ」
を持って天王寺さんの境内で、蚊にくわれながら夜



をあかししました。東の空がしらみ始めた頃、たくさん
の兵隊さんが天王寺から梅田まで行進を始めました。
これが最後の別れになるのではと、必死で我が子や夫
や兄をさがしながら、兵隊さんのあとをついて歩きま
した。丁度、天王寺さんの境内は、萩の花が満開でし
た。いまもお月見の頃、萩の花を見ると最後の別れと
なった、あの時の事を思い出します。

交通局、昔の市電に勤めていた兄は、よく名古屋の
豊橋方面へ買出しに行ってくれました。ある時、電車
も少なく終電車に乗りおくれ、途中の駅から重い荷物
を背おって歩いて帰った事もありました。やさしく
た兄は、私も買出しに連れて行ってくれ、めずらしい
物を食べさせてくれました。ゴボウや人参、おいも等、
貴重な代用食です。豊橋の駅前で長い列があるので聞
いたら「ぞうすい」今と言う「おじや」のやわらかい
のです。一緒に並んで食べさせてもらったら、えんど
う豆が入っていて、とてもおいしかった味が、いまも忘

満州から孤児を引き連れて

昭和十九年、私は満州で働く人に嫁し、渡満いたし
ました。住友勤務の主人と奉天の自宅で住み、奉天は
日本人中心の町で物資も豊富で、チケットで割と楽に
物が手に入りました。奉天には製糖会社がありましたが、そこに爆弾が落とされ、婦女子に疎開命令が出ま
した。困惑している時に、主人にも召集令状が参りま

れられません。

母も戦争の犠牲ではないでしょうか。息子が生きて
いれば、嫁をもらって老後の面倒も見てもらえたのに、
八十四歳の今も一人暮らしで頑張っています。私の家で
一緒に住もうと主人が言ってくれますが、嫁にやった
娘の世話にはなれないと、明治生れの「ガンコ」さ
で私達の言う事を聞いてくれません。

今一人暮らしの老人でやはり息子や夫を戦争で亡くさ
れて、淋しく暮らしておられる方も多いのではないで
しょうか。母は戦死の恩給等ははしくない、どんなに貧
乏しても息子や嫁や孫にかこまれてにぎやかに暮した
いと申します。最近亡くなった歌謡曲「岸壁の母」
の主人公・端野いせさんも一人息子の帰りを信じて一
人淋しく暮して居られたのに、とうとう逢えず亡くな
られました。本当に二度とこんな悲劇だけはくり返し
たくありません。

池田 津代 ●富田林支部

した。

赤ソ坊を背に、疎開地・開城に向う汽車に乗り込み
ました。汽車で五時間、まだ壁も塗り立ての建てたば
かりの家が並び、掘ったばかりの井戸は泥水でまっか
でした。その水を使って数百人の集団生活が始まりま
した。その赤い水で炊事し、産まれた赤ソ坊はその水

で産湯をつかい、多数の赤ソ坊のほとんどが亡くなり
ました。

ある日、日本が負けたというわさが流れました。
実は終戦から三日が経っていたのでした。信じ難く
人々は動揺しました。

終戦で奉天に帰る事になりました。トロッコの形
をした屋根の無い汽車に乗り、ソ連兵の気ままな運転
で、五時間のところが十五時間の旅となりました。背
に赤ソ坊をおんぶし、用足しは車上のドラム缶の上で
行いました。動かぬ赤ソ坊の生死を確かめるために、
子供の足をつねって見たものです。

奉天に帰り着いて見たものは、荒れ果てたゴミの山
の町でした。おそらく駅に保管していた荷物だったの
でしょうが、太い立派な昆布が町中に散乱していたの
を覚えています。日本敗戦を知って起った暴動の跡で
した。

ここで私は、二人目の子供を七ヶ月の早産で失いま
した。お産婆さんが居なかったのです。主人は居留民
団に就職しました。町に中共軍、八路軍、ソ連軍が入
ってきました。風紀が悪く婦女子は外へ出ることが出

戦争を知らない人に

来る夜も来る夜も灯火管制で、電灯の真下だけ、ホ
ーと丸く明りが当たっていました(灯火管制とは、敵の
飛行機の目標にならない様に、夜になると電灯に黒い

来ません。女性は断髪し、男装していました。それを
していなかった私は、ロシア兵に「来い」と追われ
わい思いをいたしました。背中に赤ソ坊がいたので
無事に済んだのでしよう。

発疹チフスの大流行と栄養失調で大勢の難民が死亡
しました。死体の山が出来ました。使用人だった満人
が八路軍に入り、かつての主人に恨みをばらさんと、
道路の真中で、ひどいしうちをした人もあります。ま
た身が危い日本人を、お世話になったとかくまってく
れる満人……様々な人間ドラマがありました。

日本への引揚げが開始されました。妊婦、婦女子、
身体の弱い人の順に引揚げです。身辺に危険を覚え、
私は主人と孤児を引き連れて祖国日本へ帰ることにな
りました。三歳から十六歳までの五〇名近い孤児と共
に船に乗り込みました。ひどい脱肛で夜通し泣き叫ん
だ子、人様の物に手をつけることに天才的であった子、
色々でした。こうして博多へたどり着きました。今、
よしんばこの身にどんなことが起って来ようとも、耐
えられるだけの貯蓄を、この体験で積んで来れたと思
っています。(聞き書き)

今村喜久恵 ●向ヶ丘支部

布でカバーする事です)。敵機襲来のサイレンが鳴る
と、更に暗くして、絶対明りがもれない様にして、防
空壕へ逃げ込みました。背中に負われた赤ソ坊の長女



も、子供心に恐いのか、目を丸くして落ちつかず、いつまでも寝つきませんでした。

私は結婚一年目で主人を召集され、親子で両親の居る実家に身を寄せていました。回りを見回しても、男子は身障者か病人か老人ぐらしか残っていません。生産に従事する動き手がないから、物を作る人もいないし、材料になる物も戦争の方に優先し、物はみるみる不足してきました。

婦人会も国防婦人会です。竹槍をかついで訓練を、毎日八幡さまの境内でやりました。古着で作った直したモンペをはいて、オイチニオイチニです。爆撃に逢って火事になったら、砂袋や竹の先に縄をぶら下げた火たたきで消そうというのです。今考えたら、本当に原始的な防衛態勢だったと思います。

私たち親子が疎開した先は、山陰の片田舎でしたから、そもそも爆撃のある所ではなかったけれど、田圃の真中で、汽車がアメリカの爆撃機におそわれたことがあります。止っている列車目掛けて、急降下爆撃し、塔乗員の顔が見える所まで降りてきて、機関銃で一斉掃射され、非戦闘員である乗客はほとんど殺されました。

夜の空に、真赤な火の塊りになって落ちていく飛行機を見て、敵のB29がやられたと思っていたら、味方

の飛行機でした。無気味なB29が隊列を組んで頭上を飛んで行く、あの爆音、あの悪魔のような姿を、今も忘れません。

あの頃とは比較にならない程発達した軍備、今だったら、もっともっと悲惨な戦争ではないでしょうか。テレビを見て、格好良い戦争を頭に描いている子供達に、もっと戦争の恐ろしさを語りついで行かねばなりません。

食べるもの、着るもの、一切配給で、いずみ生協で作る前のパニックどころの騒ぎではありません。もっともっと深刻です。砂糖もお米もミルクもない生活、若い人に想像がおつきになるでしょうか。

お国のためという一言にだまされて、最愛の人、大事な息子をとり、戦死しても、涙一つこぼされなかった時代。本土空襲の恐ろしさ、悲惨さ。一つ一つ体験した人が語り継いで、戦争を知らない人に、二度と再び戦争に巻き込まれないため、平和を守るため、今こそ声を大にして戦争反対の平和運動を、力強くやって行かねばなりません。

地下に眠る幾百万の戦争犠牲者の方々に、「安らかにお眠り下さい、二度と再び戦争はくり返しません！」と誓ったのですから。

『チチイケヌ ユルセ』

津田フミコ ●羽曳野支部

東京都北多摩郡東村山町、この地名は、今も私の胸の中に思っている。この地名を思い出した時に、もう三十七年も昔のことなのに、胸にこみあげてくる悲しみをおぼえる。東村山町の少年通信兵学校を志願した次兄は、昭和十九年四月から十一月までの八ヶ月間をこの土地で過ごした。私は次兄のいる東村山町へせっせと手紙を書き送った。

長兄とは違って、次兄とは年齢も接近していたせいもあって、兄弟中で一番仲がよかった。

私と次兄とは、稲穂の実る秋には、イナゴとりや、とんぼとりなどで、毎日野原をとびまわって遊びほらけたものだった。

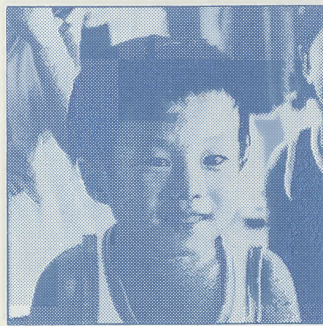
私がイナゴとりで夢中になって、のつぼへはまったことがあった。誰だつて逃げ出したくなるような、くさい、くさいのつぼの中から兄は私を助け出して、近くの川で、ていねいに洗ってくれた。そのとき兄は小学校の三年生ぐらいだったと思う。私にとって次兄は英雄のような存在だった。その兄が東京へ行ってしまった。私は淋しかった。

八月の夏期休暇に次兄は別人のように、たくましくなつてかえってきた。家の中がいきいきしたように私は思った。四日たらずの休暇はあっという間に終わった。兵学校へかえる兄を、私は駅まで見送った。村はずれの小学校の前で、「もっこのいいから」と言ってお友達の自転車にのせてもらって、手をふりながら遠ざかっていった。夕もやの中に消えて行く兄の後ろ姿を、私はいつまでもたまたまで見送っていた。それが兄との最後の別れだった。

昭和十九年十一月初旬、軍部は突然兄達に出陣を命

じた。二年間の教育課程をわずか八ヶ月で打ちきつて、南方の戦場へ送られるのである。十一月六日に、家族との最後の面会を許すと兵学校から連絡がきた。私は、当然、父が面会に行くものと思こんでいた。自分たちも連れていってもらおうと思つて姉妹三人でワイワイ騒いでいた。しかし、父は「わしは行かない」と言った。姉妹三人は一しゅん、あつげにとられ、その後泣き出した。「お父さん行ってやって、兄ちゃんか、かわいそうじゃないの」「あれが家を出る時、わたしは最後の別れをしている、今更、めめしいことを」といって、とりあつてくれなかった。そして父は「ゲンキデユケカテバンザイ」と、電報を打って来いと私に命じた。現在のように電話一本で電報が打てる時代ではない。三キロ離れた隣の本局まで行かなければならない。兄は遠い戦場へ行くと言ふのに……。もう最後の別れになるかも知れないのに……。私に羽があったら飛んで行きたい……。こんなとき母が生きていたら、何をかおいてあげたい……。
十五歳の私では、どうすることも出来ない。私は泣きながら本局へ向つて自転車を走らせた。本局の係員さんは、私の差出した電文を見て、「こんな内容ではだめですよ。軍の機密がもれますからね」といった。東京へ行けぬ自分の非力さを心でわびながら、私は萬感の思いをこめて、兄宛の電文を「チチイケヌユルセ」とかえた。

別れの人波でこつた返したであろう兵学校の片隅で、面会人のない兄はどんな思いで一夜を過ごしただろうか。遠くはなれた大阪の空で妹が泣いていたことを知っていたであろうか。



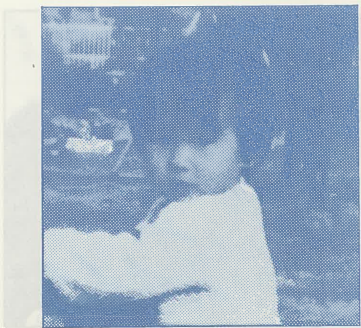
昭和十九年十一月〇日、兄達をのせた輸送船は、南方へ向けて出発した。終戦後に聞いた話だが、この頃に出航した輸送船なんかは一隻だって無事につくのはむづかしかつたという、それがわかりながら、冷酷無情にもまだ幼なごの残る少年達を、無理矢理に輸送船の船底に追こんで出航させてしまったのだった。

終戦後も兄の消息はわからなかった。どこか南方の島でも生きていて欲しいと私は祈った。
村役場で捕虜になっている軍人の名簿を閲覧させてくれることになった。片かなで書かれたたくさんの名前の中から私は兄の名前を探し求めた。似通った名前が見つかる胸おどらせたりなんかしながら、毎日、毎日、役場へ通っていた。

そんな頃、ある朝、父がしみじみと言った。「昨夜、逸治（兄のこと）の夢を見た。夜中に表をたたく音が

するので、開けて見たら、びっしょりぬれた軍服を着て立っていた。あいつはきつと海に沈んで死んだのだろう。どこで何時死んだかわからん場合は、夢に出てきたこの日を命日にしよう」。

終戦後、随分たってから兄の戦死の公報がはいった。昭和十九年十一月十六日、東支那海において、輸送船もろとも海に沈んだ旨を記してあった。かえってきた遺骨の箱の中には香炉が一つはいていた。公報が届いた日、外出先からかえると、線香のにおいが表にまでたどっていた。父が仏だん前の前でお経をあげていた。その淋しい後姿に私は父の深い悲しみを知った。面会が許された日から、わずか十日後に兄は戦死していたのだった。東京都北多摩郡東村山町へ、兄に会いに行くことの出来なかった口惜しさを私は一生忘れないだろう。



平和とは

奥川登美子

藤井寺支部

「人類が平和でありますように」と、よく戸口に貼ってあるのをみかけます。

「平和でありますように」という意味は何をさすのでしょうか。唯単に「武器をもって人を殺す国と国との戦争にはならないで」という意味なのでしょうか。心が平安でありますように、という意味なのではないでしょうか。何の不平、不満をもたず、たしな、社会が不公平、不公正に満ちみちちていても、見ざる、聞かざる、いわざるの三猿の状態になつていて、という意味なのでしょう。風はいつか止む、風の通りすぎるのを頭を下げて待っています。しょう、という考え方なのでしょうか。

私たちの国は平和だ、と人はいいいます。果してそうでしょうか。日本の国は戦争はやっています。けれどもある工場では兵器を生産し、国のまわりの海域ではつもザワザワ動いています。
税金を払えば確実にその百分の一、三六五日動いているとしたら、三分の税金は戦争のために使われています。（四人家族の家長だったら十二日分は戦争の

ために働いているという計算になります。）

戦争とは、「武器をもって人を殺す」ということのみではありません。私たち日常の生活の中においても、無意識のうちに人を傷つけているのです。私たち生協活動の中で取りくんでいる食品公害、また車社会の今日、車を動かすことによりて人に威圧を与え、騒音公害のために、どれだけの人が病んでいるかしれませぬ。私たちの心の中にも戦争を肯定し得る可能性があるのではないのでしょうか。真に私たちが戦争は恐ろしいことだと感じ、二度とおこしたくないと思うのであれば、やはり、普段の日常のささいな言動などを、考えて生活しないといけないのではないのでしょうか。そうして、自分たちの属している社会や、政治を動かせる機会には、いつもよく考えて行動し、参加しなければいけないと思えます。
太平洋戦争に入った時も、私たちの知らないところで、着々準備が進められていたのです。（知らないところで、という表現は、自分たちには戦争責任は全くないのだ、という卑怯ない方では……。）然し、何が正しいか、何をなさねばいけないか、は、しっかり物事を見つめ、よく考えたならば、そしてどんな行動を起せばよいかは、わかる筈です。

「戦争体験を語る」は、いろんな方面で、いろんな体験が語られています。悲しいこと、いまわしいことばかりです。けれど、想い出はなし、昔語りとしてとらえるのではなく、現代の生活の中に如何に生かしてゆけるかを考えたいと思います。

八月におもう

石丸 フミ

初芝支部

戦中戦後二人の赤子遊きしをいう有事立法の学習会に
母われの食べものなくて乳出でずミルクの配給たまさかなりき
男たちは召集されて老医師のようぼつ膝にとりすがりたり
夫を兵にとられし留守に遊きし児をただ抱きしめいるのみなりき
そうめん箱に死児抱き入れて釘打ちき棺桶さえも買い難ければ
目の見えぬ老婆と組み夜半を叫ぶ「警戒警報」「空襲警報」

老婆さえ並ばせられて怒鳴られたり号令の意味解らぬままに

還りきて職無き夫と下津井の沖に飯蛸釣りて売りのたり

みごもりの身の冷え堪えてひねもすを職無き夫と飯蛸を釣る

生れたる女兒は三十五日生き電灯つかぬ闇に死にたり

「かわいいそうなぞう」を読んで

鈴木

(五年)

今の上野動物園は平和で、象がげいをして見物人を「わあわあ」と喜ばしている。しかし、戦争の時、動物園にいた象は、おりがばくだんでつぶれてあはれたらいけないということで、殺されてしまった。ライオンや、トラ、くまなどの動物がみな殺された。ほくは、かわいいそうなあとと思う。でも、おりがばくだんでつぶれて、市民にめいわくをかけたたら大変だから仕方なかっただろう。初めは、暴れんぼうでいうことをきか

か。そうだとしたら、領土を広げるためには人間が何人死んでもいいのだろうか。

母は、戦争をすると大企業がもうかるからするのではないかと聞いていた。ほくは意味が分からなかった。母に聞く、「戦争では軍かみや戦車はたくさんいるやろ、それに軍かみや戦車はほとんどつぶれるからほとんど売れるやろ。だからすごく景気がよくて、もうかるんや。それにお金を積める人は戦争に行かんでもいいからな。」

ほくは、戦争のことを書いてある「はだしのゲン」というまがの本を読んだ。この本で戦争がどれほどおそろしいものかよく分かった。この本を読んで一番心に残ったのが食糧不足のことだ。米一粒を取り合ひするほど食べ物が多かったというのには、ほくにはどんな苦しさも分らない。食糧不足だけでも戦争はおそろしいものだということがよく分る。もうひとつ心に残ったことは、戦争をする世の中が狂ってしまうことだ。敵をたくさん殺して死ぬのが名誉だと思ひこみ、敵は人間とは思わず悪い悪いだものみたいに思ひこみます。自分の家族や親類が戦争で死ぬのはみんな敵のせいだと思ひこむ。ほくは、日本の戦争をおこした権力者に責任があると思ひこむ。

ないジョンから始めた。しごく係の人の心には、心のやさしいワンリーやトンキーを殺すのを一日でもおそくして、その間に戦争が終ってほしいという気持ちがあったからジョンから殺したのだろう。しかし、ジョンが死ぬとワンリーとトンキーの番になった。しごく係の人は、なんとかしてワンリーとトンキーを殺さないでもすむ方法を考えた。そして、遠い仙台へおくことにした。しかし、仙台にもばくだんが落ちておりがつぶれて市民にめいわくがかかったらいけないのでおくことはだめになった。そこで、えさを死ぬまでやらないという方法で、殺すことになった。しごく係の人は、一日でも早く、戦争が終ってほしいという気持ちで心に強くあつただろう。

最後、象は最後の力をふりしぼって芸をした。人間を最後のさいごまで信らした。しごく係の人は、もうがまんができなくなつて、えさと水をあたえた。ほんとは、水やえさをいっさいあたえてはいけない。ほくは、しごく係の気持ちが分かるような気がする。しかし、その時はもう象は死んでいた。象は、死ぬときも人間を信らして、芸をしながら死んだ。人間をここまで信らしてきた象を殺すのは、何をやるよりも悲しかっただろう。最後、しごく係の人たちが、「戦争をやめろ」というのは、あたりまえだ。つみのない、

戦争がおこると物事を正しい目で見ることが出来なくなるのだと思ひこむ。そして、戦争に反対すれば非国民といわれる。反対するほうがよほど国のことを考えていると思ひこむ。それに世の中が狂っているのだからすぐ勇氣がいると思ひこむ。日本は絶対に勝つみたいだに権力者は国民に思ひこませる。戦争とは、人の心までいがめてしまつたんだと思ひこむ。そして、戦争で権力者にだまされて犠牲になるのは、いつも国民だと思ひこむ。

こんなおそろしい戦争を二度とおこしてはいけない。それは、戦争経験者の多くの人々の願ひだろうと思ひこむ。今でも原爆の病気で苦しんでいる人もたくさんいる。戦争で死んだ人も数えきれない。現代の人間はおそろしい戦争を忘れてしまつていいのだろうか。しかし、今の子供は戦争がどれほどおそろしいか本当に分かっていない子供が多いと思ひこむ。口先だけでは戦争はいいなと言つてもどっちでもいいというふうな子供が多いと思ひこむ。戦車や戦闘機、戦艦などがあつた方がいいといつて子供がとても多いのがその証拠だと思ひこむ。今の大人はもっと戦争のおそろしさを子供たちに教えないといけません。

それはかりじやない人間を、最後まで信らしてきた象を殺すのは、しごく係の人にとっては、自分の子どもを殺すような気持ちだつただろう。戦争は、残さずすぎると思つた。ほくは、このように話を教科書にのせたら、「戦争はかっこいいな」と思つている子どもでも「戦争は残さずくだなあ」と思ひ直すにちがいないと思ひこむ。

戦争

鈴木

(中二)

戦争とはいつたてどういふものだろうか。経験のないほくにはあまり分からなかった。しかし、このごろ父や母の話や本などで戦争の本当のおそろしさが分かつてきた。そこで、ほくは戦争について考えてみた。まず、戦争は何のためにするのか、ということだ。領土を広げるためだろうか。

「青葉学園物語」を読んで

山中美由紀

(四年)

「大人たちは、どうしてせんそうとおそろしいことをするのだろうか。」天人たちは、子どもたちがいちはんかわいいと言つているが、本当に子どもがかわいいのならば、せんそうなどは、しないでほしい。なぜかと言つて、おさない子どもたちは、親なしでは、生きていけません。なのに大人たちは、せんそうをするのです。

この物語は、広島と長崎に落ちた、二つのげんしはくだんの広島の方におちたピカドンのことをえがいてありました。広島に落ちた、たった二つのげんしはくだんのために大せいのむだなきせい者を出したのです。このばくだんで親をなくし、友だちをなくした子どもたちがはこばれてくるこの学園は、子どもたちのあいとゆうじょうでみちあふれていました。この学園の子どもたちは、自分たちでさかなをつり、それを食べていました。親のいる子どもたちは、「親にあまえられていいな。」と何回思つたことでしょうか。大きい子どもも小さい子どもでもは

子ども、いくと親がこいしくなったことである。そのくるしさの中でひっそりたえていた子どもたちが、わたしには、まぶしいように思えました。子どもたちがこずかいが、ほしいばっかりに、「下向き会しゃ」などというおもしろい名前の会しゃを作っていました。わうちのありそうな物をひろっては、わずかばかりのお金をかせぎ、とうとう二千七百円まであつめました。

そのこの二千七百円といったら、たいきんだったのでは、ないでしょうか。わたしは、下向き会社というのはおもしろい名前だなきと、あてを考えてみると、子どもたちは、しんげんなのだなあとつくづくかんじしました。

せんそうは、いや、ころしくたいをするなんて、人げんは、みんななかよく生きていってほしいと、思っています。どうかもうせんそうは、どこの国でもおこらないでほしいと思います。

もしも私が戦争のとき生まれたら……

土屋美和子

(五年)

私は、ほんとうにこわい写真を見てしまった。それは、広島・長崎の原爆の写真です。私の目にこわい写真が、やき書いてはなれない。

目のない人、顔全体がやけどして、特に、鼻から土が打ちやくちゃで、目がなかった。かみの毛もむちゃくちゃで、化け物みたいだった。広島で、あんな顔になった人が、なん人もいるかな？ もっとひどいことになった人も、たくさんいるだろうな。

原爆で、家がおえて、焼け野原になっても、もえかすと、けむりの中を、ゆうれいみたいに、さまよっている人達の写真があった。死体をかんづけたり、死人の前で、なっているような、写真もあった。ほかにも、体じゅうきずだらけの人や、耳や体に、うじ虫がわいた人も写っていた。私が、もし戦争の時に生まれていたら、写真の人のようになつたかもしれない。そんなのいやだなあ。

原爆のひかい者で、今も生きている人

がいたら、原爆の話は、いっばいしてもらおうと思うけど、それだけ、生きのびている人がいるだろう。

私は、原爆の映画や、戦争の映画をなんかいも見たけど、いつも戦争って、なんかくだなあと、映画でもあんなにこわいのだから、ほんとうの戦争は、どんなにこわいかなあ。

こんど、8月9日に、長崎の原爆のおちた所に、お友達の福本さんが行きます。みんなでおった、千羽づるをもつていくので、私も、いっしょにゆめいたくさんつくった。

私は、原爆の写真を見た日に、歌をおぼえた。それは、「明日への伝言」という歌で、広島や長崎のまこととを、子供たちに伝えようという歌です。

私とお母さんは、この歌が、口ぐせになつてしまった。

土屋美和子

原爆

戦争